

文化変容モデルの誕生*

経営学輪講 Berry (1976)

Berry, J. W. (1976). *Human ecology and cognitive style*. New York: John Wiley.

大川 洋史[†]

はじめに

今日「文化変容 (acculturation) モデル」と呼ばれ、様々な現象に適用が試みられている「文化変容の類型」は、1人の研究者 Berry によって、実は、かなり特殊な分野の調査研究から生まれ、表1のように枠組みとして整理されてきたものである。すなわち「人類学的研究と心理学的研究を架橋し、文化的変数の特定と体系化という人類学の貢献と、人間行動に関するデータ収集の標準化という心理学の貢献を利用」(p. 112) して生み出された。

表1ほどにまで一般化されてしまえば、それは様々な分野に応用が可能になるし、そこから様々なインプリケーションを引き出すことも可能になる。しかし、それが具体的にどのような調査研究と思索の結果として編み出されてきたものであるのかを知らずに使うことは、危険でもある。そこで本稿では、表1の形に最初に到達した Berry の最初の著書 Berry (1976) (以下、「本書」) を取り上げ、Berry がそれまでの自身の調査研究を1冊の書物にまとめる過程で、どのようにして表1が登場したのかを明らかにしたい。

* この経営学輪講は Berry (1976) の解説と評論を大川が行ったものです。当該論文の忠実な要約ではありませんのでご注意ください。したがって、本稿を引用される場合には、「大川 (2009) によれば、Berry (1976) は.....。」あるいは「Berry (1976) は.....(大川, 2009)。」のように明記されることを推奨いたします。

[†] 東京大学大学院経済学研究科 innerdive@mvp.biglobe.ne.jp

表1 文化変容の種類

	Question 2: Are positive relations with larger society of value, and to be sought? より大きな社会との友好関係は価値があり、求められるべきか。	Question 1: Are cultural identity and customs of value, and to be retained? 文化的アイデンティティと習慣は価値あるもので、保持されるべきか。
	Yes	No
	Integration 統合	Assimilation 同化
	No	Segregation-separation 隔離・分離
		Deculturation 失文化

出所) Berry (1984, p. 12), Table 2.1 に邦訳を追加。Berry (1984), Table 2.1 のタイトルは正確には「多元社会における文化的関係の可能な形態のモデル (A model of possible forms of cultural relations in plural societies)」。

本書のモデルと構成

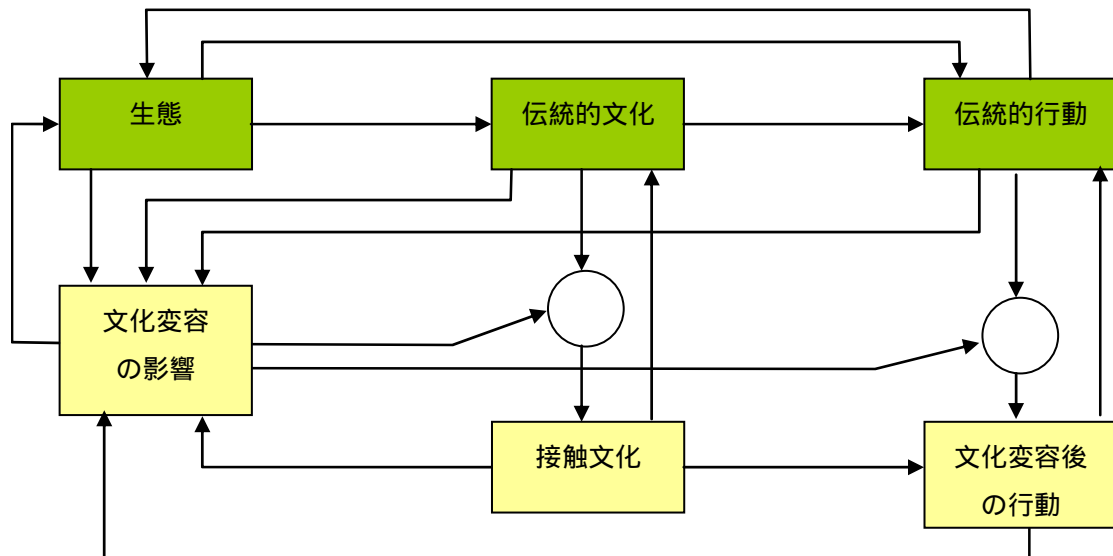
本書の研究の目的は「これまでの論文で発表した内容を包括的・総合的に提示することと、心理学の理論が異文化論においても適用できるかどうかを検討すること」(pp. 4-5)である。本書は「生態」「文化」「行動」の三つに着目し、

- (a) 人間の「行動」が「文化」によって規定され、さらに、
- (b) 「文化」が「生態」によって規定される

という関係を、「生態」「文化」の関係 (b) については人類学的知見を用い、「文化」「行動」の関係 (a) については心理学的手法を用いて、「生態」「文化」「行動」の関係を明らかにしようとしたものであった。

このように、もともとは「生態」「文化」「行動」というシンプルなモデルを基本にしていたのだが、実際には、本書第4章では図1のような複雑なモデルへと展開していく。これは、本書の目的が、図1のモデルの上段にある「生態」「文化」「行動」の三つの関連、特に生態と文化が個人の行動にどのような影響を与えているのかを調べることにあったのだが、調査研究の対象が、後で表2にも示されているような伝統的生活を営む民族であったために、西洋化という文化変容の影響も考慮する必要が生じ、図1のモデルの下段

図1 生態・文化・行動のモデル



出所) Berry (1976, p. 41), Figure 4.1 を邦訳。

として「文化変容の影響」「接触文化」「文化変容後の行動」の三つを追加したためである。

本書の構成は次のようになっている。

- 第1章 イントロダクション (Introduction)
- 第2章 文化的・行動的变化に対する生態学的観点 (An ecological and cultural perspective)
- 第3章 認知スタイルと分化 (Cognitive style and differentiation)
- 第4章 生態的・文化的・行動的モデル (An ecological-cultural-behavioral model)
- 第5章 民族：文化とサンプル¹の記述 (The people: Culture and sample descriptions)
- 第6章 実験デザイン (Experimental design)
- 第7章 適応と分化 (Adaptation and differentiation)
- 第8章 文化変容と分化 (Acculturation and differentiation)
- 第9章 分化のパターン化 (The patterning of differentiation)
- 第10章 含意と応用 (Implications and applications)

¹ 本書での「サンプル (sample)」は特定の地域に住んでいるコミュニティのことを指す語として用いられている。

第1章と第2章で生態と行動とを合わせて議論することの有用性について述べられ、第3章で本書のキー・コンセプトである「分化 (differentiation)」について説明が加えられる。実は、分化 (differentiation) の概念には社会文化的側面と心理的側面があるのだが、心理的分化は本書のモデルの被説明変数として扱われ、他方、社会文化的分化は説明変数の中に現れるので注意がいる。そして第4章では、本書の中心をなす図1のモデルが展開される。その後、第5章で本書の調査対象となっている民族の概要が記述的に述べられ、第6章で調査・分析の方法論、第7章以降がその結果と考察、その中で第8章において、表1の「文化変容の類型」の原型が登場する。本稿では、本書の中で「文化変容の類型」が生まれるまでの過程とその背景を明らかにするために、第6章の方法論を中心に、必要に応じて各章の内容に触れながら解説を行う。

調査と分析

本書の元になっている調査は、表2のように北米、オセアニア、アフリカ、ヨーロッパ地域から選んだコミュニティに属する人々を調査対象としていた。² 調査は3回に分けて行われ、第1回調査は農耕社会と狩猟社会のコントラストを示すコミュニティが選ばれてデータ収集され、³ 後にそれらの中間的な性格を持つ文化のサンプルとしてさらに二つの民族が加えられた。⁴ この第1回調査により、これ以後の研究では狩猟的生活を送る人たちと採取的生活を送る人たちに絞ることが決められた (p. 112)。

それを受けて、第2回調査では、ひとつの文化 (アメリカン・インディアン) のエリアにおける狩猟と採取のそれぞれコミュニティが選ばれたが、ひとつの文化エリアという制限を設けることで、食糧獲得パターン以外の変数をなるべくコントロールするというねらいがあった。この第2回調査で、文化変容 (acculturation) の側面が重要となってきたために、第3回調査では文化変容に注目しながら、第2回調査同様にひとつの文化内での狩猟生活と採取生活のコミュニティが選ばれて対象となった。各回の調査で調査対象となったコミュニティは、表3に示されているように、文化変容レベルと生態的 文化的レベルを組み合わせた各セルにひとつずつ入るように調査設計が行われていた。

² その民族誌的説明は第5章で比較的詳細に述べられているが、民俗誌的記述という方法は人類学的である。それぞれのサンプリングの目的と流れについては、第6章で整理されている。

³ そのサンプルのみを用いた研究は Berry (1966) で発表されている。

⁴ ニューギニアの先住民族とオーストラリアのアボリジニ。表2ではテレフォミンとハヌアバダがニューギニアの先住民族、サンタ・テレサとヤラパーがアボリジニに属す。その過程については Berry (1971) で言及されている。

表2 調査対象のサンプル

Study	Culture	Community	Traditional Exploitive Patterns	Relative Acculturation	Date of Fieldwork
調査	文化グループ	コミュニティ	食料獲得パターン	文化変容度	調査期間
1	テムネ	マヨラ	農業・畜産	低	1964, 8-10
	テムネ	ポート・ロコ	農業・畜産	高	1964, 7-8
	エスキモー	ボンド・インレット	狩猟	低	1965, 3-5
	エスキモー	フロビシャー・ベイ	狩猟	高	1965, 3, 6
	アルンタ	サンタ・テレサ	採集・狩猟	低	1967, 5-6
	クーンガンジ	ヤラバー	採集・狩猟	高	1969, 5-6
	テレフォミン	テレフォミン	農業・畜産	低	1968, 5-6
	モツ	ハヌアバダ	農業・狩猟	高	1968, 5-6
	スコットランド	インパーケイラー	農業・産業	地方・村	1968, 5-6
	スコットランド	エディンバラ	産業	都会	1965, 1-2
2	クリー	ウェミンジ	狩猟	低	1971, 6-9
	クリー	フォート・ジョージ	狩猟	高	1971, 6-9
	チムシアン	ハートレイ・ベイ	採集・狩猟	低	1972, 6-9
	チムシアン	ポート・シンプソン	採集・狩猟	高	1972, 6-9
	カリエ	タシー	狩猟・採集	低	1972, 6-9
	カリエ	フォート・サンジェームス	狩猟・採集	高	1972, 6-9
	欧州系カナダ人	ウェストポート	農業・産業	村	1973, 5-7
3	オジブウェイ	アロランド	狩猟・採集	低	1973, 6-8
	オジブウェイ	ロングラック	狩猟・採集	中	1973, 6-8
	オジブウェイ	シユー・ルックアウト	狩猟・採集	高	1974, 6-8
	欧州系カナダ人	シユー・ルックアウト	産業	町	1974, 6-8

出所) Berry (1976, p. 70), Table 5.1 をもとに筆者が和訳ならびに一部改変。

なお、表 2 中の「食料獲得パターン」という訳語について補足しておきたい。“exploitive” (イギリス英語では “exploitative”) は功利的に他人を利用する状態を表現する形容詞であるが、その動詞形の “exploit” には資源等を利用、開発するという意味もある。そこで本稿では、食料獲得のために用いている手段のパターンを Berry (1976) では “exploitive pattern” と表現していると判断し、逐語訳ならば「資源利用パターン」とすべきところを「食料獲得パターン」と表記することにした。

表3 各回調査で対象となったコミュニティの文化変容レベル / 生態的 文化的レベル

(a) 第1回調査：様々な文化・地域からサンプルを収集

文化変容レベル	生態的 文化的レベル			
	低	低中	中高	高
相対的 低	マヨラ	テレフォミン	サンタ・テレサ	ポンド・インレット
相対的 高	ポート・ロコ	ヤラバー	ハヌアバダ	フロピシャー・ベイ

(b) 第2回調査：北米のネイティブ・アメリカンに対象を限定

文化変容レベル	生態的 文化的レベル		
	低	中	高
相対的 低	ハートレイ・ベイ	タシー	ウェミンジ
相対的 高	ポート・シンプソン	フォート・サンジェームス	フォート・ジョージ

(c) 第3回調査：北米のネイティブ・アメリカンに絞り、かつ生態的・文化的に類似したサンプルを選択

文化変容レベル	生態的 文化的レベル	
	高	
相対的 低	アロランド	
中	ロングラック	
相対的 高	シユー・ルックアウト	

出所) Berry (1976, p. 114), Table 6.1 を元に筆者が邦訳ならびに加筆。

説明変数 (生態と文化)

本書の分析に用いられる説明変数は (AC)「文化変容指標 (acculturational index)」と (EC)「文化生態指標 (ecocultural index)」であり、後者 EC はさらに (EC-1) 生態指標と (EC-2) 文化指標によって構成されている。

(AC) 文化変容指標 (acculturation index)

本書では文化変容の影響は西洋化のコンテキストにおける都市化、賃金労働、教育の三つの要因によってもたらされるとしている。これらは西洋化の程度が高くなるほどに得点が高くなるように 1 点 ~ 5 点の 5 点尺度でコーディングされ、それぞれのコミュニティへ得点が与えられる。

(EC) 文化生態指標 (ecocultural index)

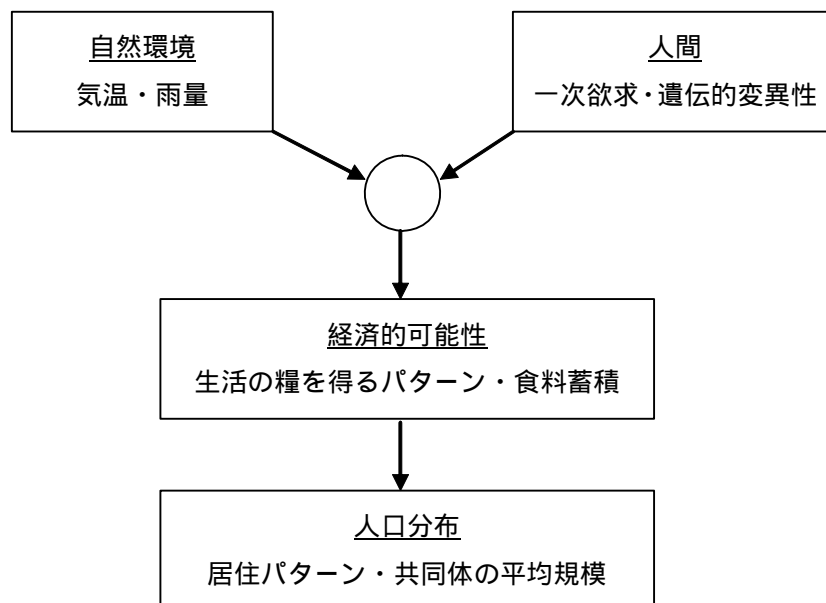
(EC-1) 生態指標 (ecological index)

本書では「生態」は気温や雨量という自然環境と人間 (human organisms) を構成要素として持ち、これらが食料獲得パターン (exploitive pattern)、と食料蓄積 (food accumulation) の程度を決定し、最終的には居住パターン (settlement pattern) やコミュニティの平均サイズ (mean size of local community) という人口分布を決定すると考えられている (図 2)。これら食料獲得パターン (exploitive pattern)、居住パターン (settlement pattern)、コミュニティの平均規模の三つをコード化し、それぞれの民族に与えた得点を元に算出したものが生態指標である。最初の食料獲得パターンでは畜産や農業よりも狩猟型の方が、また居住パターンでは定住型より遊牧型の方が、最後のコミュニティの平均規模では小さいほど、それぞれ高得点になるように設計されている。つまり、小規模な集団で移住しながら狩猟生活を営むサンプルが、生態指標において高得点となる。

(EC-2) 文化指標 (cultural index)

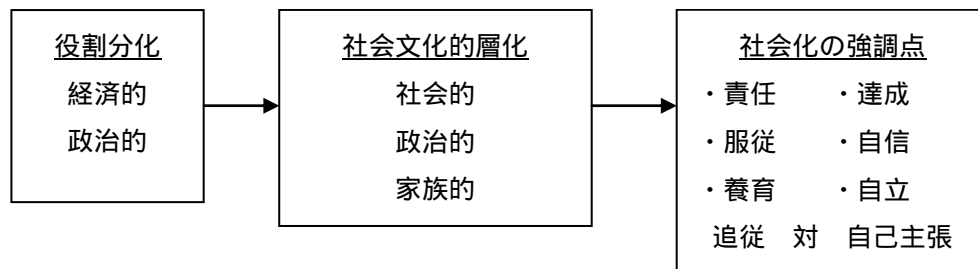
本書では、あるコミュニティにおける伝統文化 (traditional culture) と接触文化

図 2 生態の構成要素



出所) Berry (1976, p. 43), Figure 4.2 を邦訳

図3 伝統文化の構成要素



出所) Berry (1976, p. 50), Figure 4.3 を邦訳。

(contact culture) とを区別している。文化指標が対象としているのは前者の伝統文化であり、生態に対して適応し、(伝統的) 行動に対して影響を与えるものとして扱われている。この伝統文化の土台として、社会文化的分化が考えられる。これはしばしば役割分化 (role differentiation) という形で示され、高度に役割分化すると、たとえば兄弟、奴隷、大工、競争相手などの多数の「立場 (position)」 (= 社会的に認識される他者との関係) を持つ社会的グループとなり (1 人の個人が複数のポジションを持つこともある)、立場が名声や価値をともなえば、地位 (status) の概念が生じることとなる。立場や役割で高度に分化したある集団に、ヒエラルキーや社会的地位の次元があるならば、その集団は垂直的組織化もしくは層化 (stratified) しているという。こうして、伝統文化は図 3 のような構成要素をもつこととなる。そして、社会が層化しているかどうかの程度を表す「社会文化的密接性 (sociocultural tightness) 得点」と、共同体が個人に対して社会化を要求する程度を表す「社会化強調 (socialization emphasis) 得点」から、文化指標が導かれる。社会の層化の程度が小さいほど、また社会化の要求の程度が小さいほど、文化指標は高くなる。

ここで、(EC) 生態文化指標 (ecocultural index) を算出する元になる (EC-1) 生態指標と (EC-2) 文化指標との間には 0.84 と高い正の相関がある (Table 6.6, p. 127)。他方、(EC) 生態文化指標と (AC) 文化変容指標との間の相関は 0.16 と比較的低いので (Table 6.8, p. 130) 生態文化指標と文化変容指標は独立に議論される。

被説明変数

被説明変数は「行動」だが、行動は「分化 (differentiation)」と「文化変容ストレス

(acculturative stress)」の二つに分けられている。後者の「文化変容ストレス」は文字通り、文化変容に晒されている個人が感じるストレスの度合であり、後で詳述するように、精神疾患の診断などに用いられる一般的なテストによって測られる。

他方、前者の「分化」は、説明変数に登場した社会文化的分化ではなく、心理的分化を指している。本書では先行研究 Witkin, Dyk, Faterson, Goodenough and Karp (1962) にほぼ完全に依拠し、心理的分化の定義「自身と外部との間に明確な限界や境界をおいている状態」もそのまま踏襲している。すなわち、周囲の他者に同調せず、自己の判断を優先する状態を心理的分化と呼んでいる。このとき、「他者に同調しない」「自らの判断を優先する」を本書では個人の「行動」と考え、知覚テストを用いて心理的分化の測定を行っている。その際に用いられたのが「場依存 / 場独立 (field-dependence/field-independence)」の認知モデルである。

場依存的な認知スタイルの個人 (FD) と比べて、⁵ 場独立的な個人 (FID) は、社会的な文脈に捉われないという意味において認知的分化、心理的分化の状態を示すような行動をとると考えられている。そこで、この FID を FD から峻別するのに次の三つの主なテストを用いる：埋没図形検査 (Embedded Figure Test : EFT)、棒-枠組み検査 (Rod and Frame Test : RFT)、身体調節検査 (Body Adjustment Test : BAT)。⁶ これらの三つのテストは共通して、周囲に惑わされずに自己の基準のみで正確な判断ができるかどうかを試すもので、これらのテストで高得点を取れる個人が FID であると考えている。

仮説と結果

こうして、説明変数と被説明変数が揃ったところで仮説が与えられ、これをサンプル (コミュニティもしくは民族、文化) 単位と個人単位で検証することになる。仮説は表 4 のように整理される。

⁵ FID はあるコンテキスト (複雑な図形) に埋め込まれた特定の細かい図形を見つけること (disembedding) に長けている。また、概念的な分析 (analysis) や再構成 (restructuring) も相対的に得意であるという傾向を示す。逆に、外部の指示や社会的手がかり (social cues : たとえば他人の顔を見る、社会的なコミュニケーションの場に参加する) に対しては FD の方がより依存しやすいという傾向がある。

⁶ 埋没図形検査は単純な図形が埋め込まれている複雑な図形を見せ、その単純な図形を制限時間内で見つけ出すというもので、見つけるまでに要した時間がその検査のスコアとなる。棒-枠組み検査は傾いた枠内に棒を被験者の主観で垂直に置くという検査で、実際の垂直方向と被験者が置いた棒との角度の誤差の平均がスコアとなる。身体調節検査は傾いた部屋の中で椅子を直立に立てるとい検査で、RFT と同様、垂直との誤差の平均がスコアとなるものである。

表 4 仮説の分類

レベル	説明変数	被説明変数	
		「分化」のタスクの得点	文化変容ストレスの尺度
サンプル	文化生態指標	遊牧的だとサンプルの平均値が高い。	遊牧的だとサンプルの平均値が高い。
	文化変容指標	文化変容をより経験しているサンプルの平均値は、文化変容の影響を与えているコミュニティの基準に近い値となる。	文化変容をより経験しているサンプルの平均値は、文化変容の影響を与えているコミュニティの基準に近い値となる。
	上記二つの結合	EC + AC の値が最も高いサンプルの平均値が最も高い値を示す。	
個人	文化生態指標	遊牧的サンプルに属す個人の値が高い。	遊牧的サンプルに属す個人の値が高い。
	社会化	自己主張の社会化傾向を強く示す個人の値が高い。	
	文化変容指標	より文化変容されているサンプルに属す個人の値が高い。	より文化変容されているサンプルに属す個人の値が低い。
	教育	正規教育を受けている個人ほど数値が高い。	正規教育を受けている個人ほど数値が低い。
	交流	「文化変容ストレス」に関して、分化の最も高いレベルの個人は数値が低い。	

出所) Berry (1976, p. 132), Table 6.10 に pp. 133–134 のリストの抄訳を埋め込んだもの。「被説明変数」は原典では「行動のドメイン」となっている。

これらの検証結果は第 9 章にまとめられているが、「完全に支持されない仮説はなかった」(p. 200) というもので、図 1 で示したモデルも要素間の相関がそれぞれ高く、「このモデルが本質的に支持できると結論しないのは難しいだろう」(p. 208) と述べている。つまり、本書の目的はおおむね達成されたことになる。

「文化変容モデル」の誕生

本書の分析で被説明変数となっている文化変容ストレスは、 ストレス (stress) : 20 項目の神経疾患チェックリスト、 周辺性 (marginality) : 14 項目の周辺性尺度、そして自分のグループや相手グループ (西洋文化) に対する心理的姿勢に関する 24 の質問項目によって測られた。さらに の質問項目それぞれに、同化 (A : assimilation) 統合 (I : integration) 拒絶 (R : rejection) の三つの下位尺度のラベルをつけて、表 5 のように同化

表5 グループとの関係への姿勢に関する質問項目

項目番号	下位尺度	質問内容
1	R	インディアンたちは白人と決して協力する必要がないように完全に自給自足であるべきだ。
2	I	インディアンは白人と結婚するよりもインディアン同士で結婚する方がよい。
3	A	成功しているあらゆるインディアンは自らがインディアンの末裔であることを忘れようとするべきだ。
4	R	インディアンは居留地にいる方が困難に遭遇する都市に出るよりもよい。
5	R	インディアンたちは何か得るものがあるときのみ白人と協力すべきだ。
6	I	先住民団体を持つことは実は他のカナダ人とインディアンを異なるようにするため、良い考えとはいえない。
7	R	白人の文化にはインディアンたちにとって有益となるような側面はない。
8	A	インディアンたちは白人とできる限り協力をすべきではない。
9	A	インディアンが成功する現実の唯一の方法は他のインディアンたちから解離することである。
10	A	白人共同体に住んでいるあらゆるインディアンは周囲と同じように振舞うべきだ。
11	I	インディアンたちは自らの民族の生存を確実にするためにできる限りのことをすべきだ。
12	A	インディアンの親たちが白人共同体の中で文化の相違性を維持することは構わないが、子供たちが他のカナダ人と全く同様になるように奨励すべきだ。
13	A	インディアンたちの社会活動はインディアン自身に限定されるべきだ。
14	A	複数のインディアンたちが同じ仕事で働いているならば、一緒になれるように同じセクションに配置されるべきだ。
15	I	インディアンたちが集団としてとどまれるように促すことは共同体への受容を妨げるだけである。
16	I	現在都市に生活しているインディアンたちのほとんどは実は自分たちの祖先の生活や文化について知ることに全く関心を持っていない。
17	R	インディアンたちは自らの生活様式で過ごして社会の自分たち以外の者とは独立しておくべきだ。
18	I	現在インディアン文化はほとんど現存していないので、保護する価値は実はない。
19	I	インディアンの伝統的生活様式に注目することは、社会において進歩することを妨げるだけである。
20	I	インディアンたちは他のインディアンたちの中から友人を求めべきである。
21	A	インディアンたちは社会の内部では何としてでも分離した共同体として行動すべきだ。
22	I	インディアンの子供たちは遊び相手として他のインディアンを選ぶべきだ。
23	A	インディアンが企業を設立するならば、インディアンを雇用すべきだ。
24	R	カナダは白人の到来によって初めて発展したという事実は、インディアンたちが進歩したいときには白人たちの例に従わなければならないということを明らかに示している。

出所) Berry (1976, pp. 179-180), Table 8.3 を邦訳。

(A) 9項目、統合 (I) 9項目、拒絶 (R) 6項目に分類した。質問項目は「全くそう思う (strong agree)」が5点、「全くそう思わない (strong disagree)」が1点の5点リッカート尺度で得点が与えられ、三つの下位尺度については、下位尺度ごとに合計点数を計算し、それをもとにコミュニティ別に平均値や標準偏差、相関係数を求めるという分析を行っている。しかし、ここで注目すべきは、その分析結果ではない。その際に、こうして三つに分類した質問項目間の関係を表6のように整理したということなのである。

表6 文化変容しているコミュニティに向けられる主要な二つの質問

		Is traditional culture of value and to be retained? 伝統文化は価値があり保持されるべきか。	
		Yes	No
Are positive relations with the larger society to be sought? より大きな社会との前向きな関係は求められるべきか。	Yes	integration 統合	assimilation 同化
	No	rejection (segregation) 拒絶 (隔離)	(deculturation) (失文化)

出所) Berry (1976, p. 181), Table 8.4 に邦訳を追加。括弧は本書ママ。なお、タイトルも原著の邦訳である。

表6は横軸を「伝統的文化が価値があり保持されるべきか (Is traditional culture of value and to be retained?)」という質問、縦軸を「より大きな社会との前向きな関係は求められるべきか (Are positive relations with the larger society to be sought?)」という質問で構成し、それぞれを Yes / No で、すなわち「伝統的生活を捨てる / 維持する」「西洋化を望む / 望まない」で2分し、2×2の四つのセルを作り、該当するセルに下位尺度のラベルを入れていったものであることがわかる。しかし、下位尺度はもともと3種類しかなく、表6右下のセルが空欄になってしまう。そこに、「失文化 (deculturation)」というラベルが括弧つきであてがわれ、全てのセルが埋められた。実は、これが「文化変容モデル」としてのちの他研究において引用されることとなる⁷「文化変容の類型」の誕生であった。二つの質問の Yes / No で2×2の四つのセルを作り、そこに同化、統合、拒絶のラベルを入れるという表形式を Berry が提示したのは (少なくとも入手可能な文献で確認したところ) 本書が初めてである。⁸

ただし驚くべきことに、繰り返しになるが、この表6は、24の質問項目の分類ラベルの整理のために考え出されたものであり、しかも最初は、分類ラベルは同化、統合、拒絶の三つしかなかったのである。このように、最初、自文化と西洋文化に対する心理的姿勢

⁷ たとえば Nahavandi and Malekzadeh (1988)。

⁸ ただし、Berry (1974, pp. 18–20) には、文化的に多様な社会における少数民族のあり方のパターンを、アイデンティティを維持する・しない、支配的なグループと前向きに関係する・しない、前者二つの選択が自発的かそうでないか、という三つの Yes / No 式の質問を用いて 2×2×2 = 8種類に分類することを提唱している。しかし、後に Berry 自身もその他の研究者も頻繁に利用することとなる文化変容の4種類の雛形が登場したのは本書が最初だと考えられる。

に関する 24 の質問項目を分類するための表だった表 6 が、「文化変容の類型」へと変化し、該当する質問がなかったセルに付けられた仮ラベル「(失文化)」の括弧が外されて、「多元社会における文化的関係の可能な形態のモデル」と称した表 1 のようになるのは Berry (1984) のことである。⁹

そもそもなぜ自文化と西洋文化に対する心理的姿勢に関する 24 の質問項目の分類ラベルが三つしかなかったのだろうか。いいかえれば、なぜ表 6 がモデルとしては不完全な、括弧付きのセルを持つものとして提示されたのであろうか。

まず、右下のセルについて吟味が不十分であったのではないかという理由が考えられる。空白として残る、右下の第 4 のセルに該当する状態（二つの質問に対して両方とも No）を考慮しない理由について、Berry 自身は「常識的にも予備調査でも示唆されたのは、このような結果は誰にも選択されないということ (both common sense and pilot work indicated that such an outcome was not to be chosen by anyone)」(p. 180) としている。そして、「しかしながら、周辺性の概念の一部の特徴が、この（二つの質問の）組み合わせの感情と関連を持つかもしれない」(p. 180、括弧内は筆者注) と言葉を継いでいる。しかし、ここに「周辺性」が登場することには、かなりの違和感がある。なぜなら、「周辺性」を測る 14 の質問項目（表 7）には、自文化と西洋文化に対する心理的姿勢に関する項目が含まれていないからである。もし表 6 の第 4 のセルに「周辺性」を入れるのであれば、表 6 のタイトルはもはや「文化変容しているコミュニティに向けられる主要な二つの質問」ではなくなるはずである。にもかかわらず、この「周辺性」は本書より後の Berry の研究のいくつかにおいて失文化に代わるラベルとして登場し続ける。Berry の文化変容モデルが様々な研究によって引用されるようになった最近に至っても、たとえば Berry (1997) では「周辺性」が用いられ、表 6 の誕生から 20 年以上が経過しても、「失文化」と「周辺性」との間での逡巡は終わっていないのである。

表 6 が文化変容モデルとして完成されなかった理由としてもう 1 点が考えられる。文化

⁹ Nahavandi and Malekzadeh (1988) には Berry (1984) の他に Berry (1983) も文化変容モデルが提示されている研究として引用されているが、本稿発表時点では入手不可能のため Berry (1983) の文化変容モデルの詳細については確認されていない。しかしながら、Nahavandi and Malekzadeh (1988, pp. 82–83) がモデルの形式や 4 類型の定義について Berry (1983) から引用した部分からは、形式的にも内容的にも Berry (1983) モデルと Berry (1984) モデルはほぼ同一であると判断できる。唯一、異なる可能性があるのは、Berry (1984) のモデルでは「隔離・分離 (segregation-separation)」となっている左下のセルが Berry (1983) では「分離 (separation)」となっていると推測される点である。

表7 周辺性尺度

1. 成功した人間は他の人間も成功しようとするのを妨げようと最善を尽くす。
2. 誰も本当は自分を理解していないと感じる。
3. 長い間椅子に座ってられないほど私は落ち着きがない。
4. 人の私に対する扱い方が日によって違う。
5. 私には人生とは試練である。
6. 私は突然、以前とても好きだったものを嫌いになる。
7. もし他人が邪魔をしなかったら、私は現在よりもっと裕福だろう。
8. 自分がどこにも属していないと感じる。
9. 他人と同じくらい幸せになりたいと思う。
10. 怒っているときには外見を構ってられなくなる。
11. たいていの人より私の方が神経質である。
12. 私は周囲の人から何らかの点で距離があると感じる。
13. 自分がした決定を悔やんでいる。
14. 世の中は性悪な男性や女性で満ちている危険な場所だ。

出所) Berry (1976, p. 178), Table 8.2 を邦訳。

変容モデルの大きな特徴のひとつは心理傾向を 2×2 で分類したその切れ味の良さにある。表 6 もモデルとして明確さを優先しようとするならば、個人は二つの質問によって 4 種類のどこかひとつのセルに分類されると考えなければならない。しかし、上述のように本書での表 6 の類型化の発端は表 5 にある 24 の質問項目の整理であった。それらの質問への回答内容によっては 3 種類の下位尺度で表現される心理傾向のうち 2 種類、3 種類の傾向が共存する結果が生じる場合も当然ながら可能である。その場合、前提となっている個人は伝統、文化、生活などの様々な側面に対して多層的な心理傾向を持つ複雑な主体ということになるが、本書はその観点を優先したのである。実際、本書では表 8 のように文化変容ストレスの尺度間の相関が求められ、個人の複雑な心理とストレスとの関係についてインプリケーションを導いている (pp. 191–192)。表 6 を完成されたモデルとして利用するならば、一個人に複数の心理傾向が同居するという前提を置かないであろうから、心理傾向間の相関は問題にならないはずである。

このように、自文化と西洋文化に対する心理的姿勢に関する質問項目を分類するための表として本書で誕生した表 6 は、Berry (1984) では意味する内容が「文化変容の類型」へ変化してしまったのである。「文化変容の類型」の表 1 は、表 6 を外形的に引き継いでいるだけで、意味する内容は異なってしまった。その変化ゆえに多くの研究で引用されるようになったのであるが、同時にその変化は、表 6 がもっていた存在の根拠たる膨大な調査

表 8 サンプルと個人レベルの文化変容ストレス尺度間の相関

		ストレス	周辺性	同化	統合	拒絶
サンプル レベル	ストレス <i>n</i> = 9					
	周辺性 <i>n</i> = 9	0.80				
	同化 <i>n</i> = 9	- 0.84	- 0.91			
	統合 <i>n</i> = 9	0.75	0.85	- 0.72		
	拒絶 <i>n</i> = 9	0.54	0.72	- 0.87	0.45	
	個人 レベル	ストレス <i>n</i> = 433				
	周辺性 <i>n</i> = 423	0.58				
	同化 <i>n</i> = 453	- 0.24	- 0.27			
	統合 <i>n</i> = 453	- 0.17	- 0.22	- 0.45		
	拒絶 <i>n</i> = 453	0.28	0.26	- 0.24	0.31	

出所) Berry (1976, p. 192), Table 8.12 を再構成し邦訳。なお、全ての相関が 5 パーセント有意である。

データを失うことも意味していた。第 4 のセルを「失文化」概念で埋めて文化変容モデルとして生かすべきか、あるいは実際に調査で用いた大量の質問項目を生かすべく下位尺度の整理表として生かすべきか。Berry 自身のこの逡巡の歴史は、学術的根拠を取るか、それとも学界でのモデルとしての人気を取るかの逡巡の歴史でもあるのではないだろうか。

参考文献

- Berry, J. W. (1966). Temne and Eskimo perceptual skills. *International Journal of Psychology*, 1, 207–229.
- Berry, J. W. (1971). Ecological and cultural factors in spatial perceptual development. *Canadian Journal of Behavioral Science*, 3(4), 324–336.
- Berry, J. W. (1974). Psychological aspects of cultural pluralism: Unity and identity reconsidered. *Topics in culture learning*, 2, 17–22.
- Berry, J. W. (1976). *Human ecology and cognitive style*. New York: John Wiley.
- Berry, J. W. (1983). Acculturation: A comparative analysis of alternative forms. In R. Samuda & S. Woods (Eds.), *Perspectives in Immigrant and Minority Education*, (pp. 65–78). New York: University Press of

America.

Berry, J. W. (1984). Cultural relations in plural societies: Alternatives to segregation and their sociopsychological implications. In N. Miller & M. B. Brewer (Eds.), *Groups in contact: The psychology of desegregation* (pp. 11–27). Orlando, FL: Academic Press.

Berry, J. W. (1997). Immigration, acculturation, and adaptation. *Applied Psychology*, 46(1), 5–34.

Nahavandi, A., & Malekzadeh, A. R. (1988). Acculturation in mergers and acquisitions. *Academy of Management Review*, 13(1), 79–90.

Witkin, H. A., Dyk, R. B., Faterson, H. F., Goodenough, D. R., & Karp, S. A. (1962). *Psychological differentiation*. New York: John Willey.

赤門マネジメント・レビュー編集委員会

編集長 新宅 純二郎

副編集長 天野 倫文

編集委員 阿部 誠 粕谷 誠 高橋 伸夫 藤本 隆宏

編集担当 西田 麻希

赤門マネジメント・レビュー 8巻7号 2009年7月25日発行

編集 東京大学大学院経済学研究科 ABAS/AMR 編集委員会

発行 特定非営利活動法人グローバルビジネスリサーチセンター

理事長 高橋 伸夫

東京都文京区本郷

<http://www.gbrc.jp>